

治水家としての河村瑞賢(下)

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	古田,良一
発行元	水利科学研究所
巻/号	9巻3号
掲載ページ	p. 41-46
発行年月	1965年8月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



治水家としての河村瑞賢（下）

古田 良一（下）

4

淀川の水害が年々甚しくなるので、江戸幕府も終に治水の策を講ずることになり、天和3年（1683）2月に、稲葉石見守（正休）、彦坂耆岐守（正紹）、大岡備前守（清重）の三人を畿内に派遣し、治水の策を立てさせることにした。この時に河村瑞賢に随行を命じた。これは恐らく瑞賢がそれまでにも江戸付近の河川の治水をやったことがあり、その手腕が認められていたからであろう。一行は3月に京都に到着し、瑞賢は命を奉じて、河川を巡視した。まず加茂川および白川に行き、ついで桂川の上流を探ろうとしたが、道路がけわしく、渉ることができないので、老の坂を越えて丹後に入り、保津川を下って嵯峨に至った。ついで淀、鳥羽に至り、伏見から淀川を舟で大阪に出て河口を視察した。さらに東の方は大和川筋を見、東北の山々の土砂が崩れ落ちる状態を明らかにし、また摂津の西南部の水害に苦しむ地方の水流を調査し、また中津川を遡り、神崎川から尼崎に出て、そこから海上を堺、住吉などに至って、淀川の川口をよく視察した。ついで大阪を出発し、生駒を越えて奈良に向かい、木津川に沿うて下って宇治に至り、鹿飛、供御瀬、石山を経て勢多に出て、琵琶湖の水の流れ出る口まで行った。

こうして瑞賢は詳細に視察をして京都に帰り、絵図を作って石見守に上申した。石見守等三人はこの意見を容れ、閏五月に江戸に帰って幕府に復命した。その復命の要点は、川々の水源を見ると、森林伐採のため、山が崩れ土砂が川に落ち、河身を埋め、これが水害の原因となっているから、水源森林の取締法を立てる必要がある。河身の改修、堤防の修築をしなければならぬ。この度の河竣費は国庫の負担とし、以後毎年の河川改修は、山陰・山陽・四国・九州など、すべて大阪と交通し、この川を利用する国々から取り立てて経費にあてること。大和川流域の変更は必要でないこと。四か条であ

る。当時一般に唱えられ、仁右衛門が一命を棄てた大和川付替案は瑞賢には採用されなかった。瑞賢の反対した理由は、『翁草』によると、大和川を付けかえれば、川の里数もちぢまり、古川床の開発もできて、利益のように見えるが、後年に至り、川床が高くなり、入船自在ならず、運送が差支えるというのであった。河功費を諸国に負担させることは、石見守もその必要なことを認めて、瑞賢に実行についての案を作らせたのであるが、ついに行なわれるに至らなかった。そして水源地の取締と河道の改修工事とは、これを分離し、山林の取締についてはその地方の領主に命じ、改修の工事はすべて瑞賢に一任することとし、天和3年9月に石見守の屋敷に瑞賢を呼び寄せ、壱岐守と備前守も立会って、工事の実行を命じた。

5

瑞賢は12月に江戸を出発し、翌年すなわち貞享元年（1684）正月に京都に著いて、所司代稲葉丹後守（正征）に会って来意を述べ、その月に大阪に下って、いよいよ工事に着手した。時に瑞賢は67歳であった。工事は先ず九条島の中央に新川を掘ることから始められた。九条島は淀川が海に入る処にあって、さながら淀川の流を遮っておる。このため淀川の流れは停滞し、河床が高くなって、水害の原因となる。元来この島は人工で築造したものである。それは海から来る高潮を防ぐためである。大阪は少し風が強いと海潮が川筋を逆流して来る。甚しい時には、船が沈み、橋を流し、人家をそこなう。それが頻繁にあるので、人民は大いに苦しんだ。元和の末に香西哲雲という武士があって、武田信玄の後裔と称し、水理に長じていたが、池田如山という人物と共に、この高潮を防ぐ計画を立て、官に申立てて、海岸に大きな山を築き、海潮の逆流を防いだ。これが四貫島、九条島である。これは当時においては非常にほめられたところで、林羅山も詩を作ってこれを称揚したとのことであるが、流れの末をとめたので、上流に変動を起し、後年水患の原因となったのである。瑞賢は命を受けるや、水理の巧者を集めてその意見を聴き、水害の根源は九条島にあるとし、島の中央に長さ一千丈、幅三十丈の川を掘ることにした。2月11日にその工を起したのであるが、畿内の人民は久しく望んだ治水工事が行なわれるのであるから、喜んで労役に服し、遠方からも集まったから、隊を分ち、隊を集めて部を立て、隊に隊長、部に

部長を置き、指揮命令し、僅かに20日あまりで竣工した。駿速驚くべき手際である。その工事に当っては瑞賢の発明による新しい技法を用いたようであるが、その詳細はよくわからぬ。かくてできた川は九条の新川と呼ばれたが、元禄11年4月に安治川と命名された。

6

新川の開通によって、琵琶湖の流れ口においては水勢が急になり、淀の水車の回転の速度が加わり、水の流れの早くなるにつれて、流域の溜り水も次第に減少するに至った。そして新河を掘ってできた泥土は、新河の南に積み上げて山をつくり、山上に松を植えて海上を往来する船の目印にした。この山を波除山なみよけと名づけたが、人はこれを瑞賢山と呼んだとのことである。この工事は大工事ではあったけれども、これだけではいけない。いろいろの原因によって河身が埋没し、処々に洲ができ、その洲に木が生え、葦が茂る。そこでこれら水害を生ずる種々の原因を除く工事をしなければならぬ。

淀川の水は長柄ながらで二つに分れ、淀川と中津川の二つになるが、中津川の水勢が強いため、淀川の流れは浅くなり、舟運が不便となった。今まで種々の策がなされたが、効がないので、瑞賢は新しい技法を用いた。すなわち長柄の分水点に圀なごらと名づける大樁を川の中に入れた。これは木を組み、中に石を詰めたものであって、明の永楽10年工部主事藺芳という人の創案である。そしてこの圀の上に竹篠を立てると、水勢が両分され、中津川の流れはゆるやかにになり、淀川は流れが停滞せぬようになった。この竹篠は樋といい、篠のついた竹であるが、これを川の中に立てると、水に逆わずして水を制し、土砂を蓄えて自然に工事の用をなすとのことで、漢の武帝の時に用いられた方法だという。瑞賢が和漢の治水についての事実を知っていたので、機に臨んで活用したのである。

次に淀川の下流は中之島の東において、土佐堀川と堂島川の二つに分れ、堂島川からさらに曽根崎川が分れ、九条島の東でこの三流が合して海に注いでいた。しかし水が土佐堀川にのみ多く流れ、堂島川と曽根崎川は水がかかれ、特に堂島川は土砂がたまって陸地になり、乞食などが群居してほとんど集落の状をなしていたので、これを一掃し、葦を刈り、河岸を改修し、元通り水がよく流れるようにしようとして、着々功を奏しつつある時に、急に江

戸に帰るようにとの命令に接した。

7

安治川が開通した頃に、幕府の内部にこの工事の打切り論が起った。それは延宝8年以来凶作、地震が相次ぎ、財用逼迫しているところへ、綱吉將軍のひとり娘の鶴姫が紀伊の綱教に嫁することとなったので、その費用も並大抵ではないから、治水のためにそんなに金をかけることはできない。すべての計画を縮少し、大抵のところまで打切というので、そのために瑞賢を召喚することになったのである。この打切り論の主唱者は大老堀田筑前守（正俊）であって、いわば政治的裁断を下したものである。ところが堀田大老は貞享元年（1684）8月28日、恰も瑞賢が江戸に着くという日に、殿中で稲葉石見守に刺殺された。この事件の真相はよくわからぬけれども、畿内の治水に関することが一つの原因であったことは確かである。これについて、稲葉石見守は治水工事の費用を四万両と見積ったが、堀田大老は瑞賢に見積らせ、半額の二万両で工事をすることになったので、石見守が怒ったとのが往々にしていわれるが、これは事実ではないと思う。石見守は瑞賢の調査にもとづいて見積額を出したのであるから、両者に相違のあるはずはない。ことに河普請を命ずる時にも、瑞賢を石見守の邸に呼んで申渡しておるから、兩人の間に意見の相違があろうとは思われぬ。これは石見守は瑞賢の立案通りに遂行しようとし、堀田大老の打切り論に反対し、それに他の原因が加わって、終に刃傷に及んだものと思う。

瑞賢は江戸に戻ったけれども、石見守も居らず、筑前守もいない。誰を相手に話をしてよいかもわからない。しかし筑前守の存命中に、工事は中止すると決定していたのであるから、その旨が伝えられた。瑞賢は大いに驚き、中止の不得策なことを述べたが、財用逼迫のため完全な工事は到底できぬ。そこで今までやったところを無駄にせぬ程度の工事をやるということになり、11月瑞賢は大阪に至り、翌貞享2年（1685）正月江戸に帰って、絵図を以て工事のまだできていない処を上申した。幕府の協議は手間取り、漸くにして11月に決定、続行することになり、瑞賢は江戸を發し、京都に至り、所司代土屋相模守（政直）に謁し、12月大阪に行つて工事を興した。そして今までは瑞賢を監督する役人が付添っていたが、今後は監督を派遣せぬことに

なった。瑞賢に対する信用が厚くなったからであろう。

8

今回の工事は主として川の下流の改修に力を用いた。すなわち、堂島川の下流に土砂が堆積して丘陵の如くなり、水が流れないので、これを切り開いて通水をよくし、また曾根崎から福島に至る一帯の河岸と中之島の北岸に道路を開き、あるいは橋をかけて往来に便にし、九条島の河岸もまたこれを改修した。これで淀川の下流の治水工事はほぼでき上がったが、大和川がそのままでは被害が絶えぬ。よって翌貞享3年(1686)3月から大和川の工事にかかった。すなわち上流の洲を除き、下流の流通をよくし、難波、天満、天神の三大橋の下を広め橋を長くし、長柄の辺を改修し、図らずも長柄の橋杭を掘出した。次に西の方、神崎川の江口、吹田から尼崎に至る間を掘って水深を深くし、また中津川一帯や伝法、四貫島の辺にも工事を施し、淀川が海に流れ込む辺には、水流を阻むような堤防を作らず、水田を開墾せず、蘆が茂っておればこれを刈り尽し、専ら海口を広くして、水勢によって土砂を遠くに押し流すように工夫をした。また淀川の河底には棄てられた石が多く沈んでいるからというので、これを取り除き、また上流の山に植林すべきことを説いた。

瑞賢が工事を始めてから四年にして完工、貞享4年(1687)5月に江戸に帰って報告をした。これによって水害がなくなったのみならず、堂島、福島から安治川の兩岸に至る沿岸に、新たに市街地が作られ、富民土豪が集り住んで賑やかな町となった。瑞賢時に年七十、幕府はその労を賞し、銀若干を下した。

しかし工事はこれでまだ完全とはいえなかった。その後十一年を過ぎ、元禄11年(1698)に瑞賢八十一歳の老軀をひっさげ、命を奉じて、前年の工事の足りないところをやることになり、5月の初めに江戸を発して大阪に至った。そしてその工事のでき上がったのは翌12年(1699)2月であって、3月瑞賢は江戸に帰ったが、間もなく病の床に臥して、6月16日に死去した。

以上が瑞賢の畿内治水事業の大略である。その功績の大なることは言うまでもないが、ただ大和川のこのみは、やはり川筋を付け替るべきであったと思う。果して元禄16年(1703)に至り、幕府は新大和川を開さくして、河

水を堺で海に注がせることにし、翌宝永元年（1704）10月に完成した。この工事は河内の今米村の庄屋甚兵衛の三十年に亘る奔走の結果にできたものであり、これにより新田 750 町歩を開いた。ただ新大和川の開けたために、瑞賢がいった通り、淀川が減水し、また堺の海が土砂のため浅くなって堺が衰微したといわれる。しかし淀川の減水といっても、河口に近い処で従来大和川の流れ落ちていたのがなくなったのであるから、淀川の水運にさまで大きな影響を及ぼしたとは考えられぬ。また堺は南蛮貿易の盛んであった時代は昔の夢で、国内経済の大勢から見て、大阪に圧倒されるのは自然の成行きであり、海の浅い深いが問題ではないと考えられる。とにかく大和川に関する限り、瑞賢の意見は千慮の一矢というべきであろう。

9

瑞賢の治水に関する事蹟は外にもあるであろう。延宝 2 年（1674）五十七歳の時、越後高田藩主松平光長に招かれ、高田に滞在すること三か年、その間、家老小栗美作守正矩^{まさのり}の相談に応じて、中江用水の開き、郷津湾の築港などを献策した。中江用水は四か年の歳月を経て、延宝 6 年（1678）に完成し、3,700 町歩を灌漑した大事業であるが、これが瑞賢の指示によってできたものである。郷津湾の築港は、直江津港を一新させたもので、保倉川の水路を替えて関川に落し、関川の水量不足^{おとぶけ}によって生ずる土砂の河口埋没を防ぎ、大船の港への出入を便にし、兼ねて大瀬、大渦地方の湛水を除き、この地方の新田開発を目的としたものである。また関川の川底を深くさらえ、上流高田より三里の板倉町田井の川岸まで大船が自由に往来することができるようにした。これはもちろん城下町高田の繁栄をはかり、物資の流通を容易にしたものであるが、その主眼とするところは、幕府の御城米や高田藩の御蔵米を直江津港に積み出すに便利にするためであった。こういうようなことは、他の諸藩においても瑞賢はやっているかもしれぬ。尾張藩の依頼で名古屋の堀川を改修したという話が残っていることなどもその一例であるが、確かな史料はなく、明らかでない。しかし治水家としての瑞賢を語るには、畿内治水の一事をもって十分であると思う。